

マを解きほぐしたり、メディアエーションしたりすることでそれまで予想していなかった側面も現れてくるでしょう。公的記憶の別の語り方を構築する作業は、時間の遅れをかたちにできるアートの大きな役割なのではないかと思えます。

また時間的な遅れの問題とあわせて空間的な広がりも重要でしょう。吉川さんは、チリの人に向かって記憶を共有していくということも行っています。目撃者という先ほどの概念と関連させるならば、ある地域共同体だけではなくて、より広いウィットネスとの関係性をどのように構築していくのかというのも一つのトラウマ文化の課題ではないかと私は考えています。夜にキャンドルなどを掲げるビジル（寝ずの番）という取り組みがありますが、遠くからでも、事態を見守り気持ちを寄せるという心のあり様は、トラウマに共有して向きあおうとするケアやアートの本質に関わるでしょう。

アートプロジェクトやアートで市民参加を促す近年の取り組みを、どのように評価していくのか、それが美的な経験とどのような関係するのかという問題もまたありますが、それについてはまた別の機会に考えていければと思います。とりあえず私からの話題は終わりにします。

## ■討議・質疑 2

森 公的記憶として、トラウマ文化は特殊な位置にあるのか。公共的な記憶はトラウマに関わるものだけではないですが、その辺いかがですか。

司会（石谷） 特に近年の欧米での文化論なんかを見ていると、一九九〇年代にユダヤ人の虐殺や強制収容所の経験すなわちホロコーストが非常に象徴的にトラウマや記憶文化論が練り上げられていく下地になった部分はあると思います。ある種の世界的な枠組みでユダヤ人虐殺の問題が関心を持たれて、文化研究に非常に大きな影響を与えました。

そこから派生して、現代は文化的なトラウマという概念が表れてきて、そのことが様々に議論される状況になっています。

そこには、政治的暴力、拷問被害者の問題から、ルワンダやボスニアヘルツェゴビナやパレスチナでの虐殺に対する注目など多分化主義化する傾向があり、過去の奴隷制から、現在の人身売買被害者まで議論されます。さらに、スマトラの津波からハイチの地震、そして日本での災害のように、文化的なトラウマの問題として世界的に共有して議論されるような広がりを持っています。ただ、今日の議論で、誰に対して語るのかという問題がでしたが、世界に対して語るといことが、個々の地域

に暮らす人たちにどのように受け取られるのかとか、誰が代表して語れるのか、といった問題も出てくるでしょう。

経験の単独性がどのようにユニバーサルな経験として語られるのか、語られないのかという問題ですが、チリが話題になっていて、森先生がご紹介したNETの技法はわりとチリの国内的な問題、内戦のときの経験とも結びついていて実践されたという話をちらっと聞いたことがあります。そこら辺のトピックへと広げられるでしょうか。

森 それはどうでしょうかね。NETは曝露療法と証言療法という二つの治療法のアイデアを組み合わせたものです。証言療法はチリの拷問被害者に対する治療から発生したということを申し上げます。

ただ、チリの実践がそのままNETにつながっているわけではなく、ドイツでNETを開発するときにその経験を生かして新しい技法として作られたということです。ただ、トラウマ経験はユニバーサルなものと考えられていますので、どこかの地域によるものでも、ほかの地域のトラウマ体験と共通性を持っているという感覚があると思います。

司会（石谷） ユニバーサルな技法としてトラウマに向き合うことができるという側面と、先ほど議論に出てきましたけれども、日本人だと語りにくいという文化的な差異もあります。文化的と言ったらいいか、社会的認識や教育の仕方の差異と言っ

た方がいいのではないかと私は考えておりますが。

吉川さんはチリに行かれて、チリの子どもたちと日本人の子どもたちでつらい出来事に対して向き合い方が違う印象はありましたか。

吉川 全然そのぐらい深くつき合っていないですね。町はそのままなんです。被災していないというか、もう三年たつていすので、三ブロック先まで津波が来たとおっしゃっていましたが、そう流出は激しくありませんね。なので、直接的な被害を受けた子どもはたぶん少なかったのだらうと思います。

南三陸町の状況を話したところ非常にみんなびびくりしていたので、トラウマを持っている子がいるかどうかさえわかりませんでした。普通の、被害を受けている子どもたちという感じではないように見受けました。

ただ、さつき出てきた民宿が全部流された女の子に関しては全く家がなくなっていて、いま民宿の一室で家族が過ごしているの、自分のリアルな経験に基づいた素晴らしいコメントになっていました。彼女の言葉は志津川高校の生徒たちにはダイレクトに響いたと思います。

兼子 近畿医療福祉大学（現在、神戸医療福祉大学）の兼子と申します。私はアートセラピストの全国実態調査を始めています。さつき吉川さんの活動にもともとセラピー的な意識が有ったのか無かったのか、最初に確認した者です。実は、調査の過

程で見えてきていることですが、アート側の人たちが、セラピー的な意識があるかないかは別として、とにかく傷ついた心を癒したいという目的でセラピー的な活動に参入してきています。いま石谷先生がおっしゃったアート・メディアエーターという職業ジャンルは日本では認識がないので、(セラピスト的な活動をするアーティストの呼称として)あり得るのかなということが認識できたので、それにお礼を申し上げます。

次に後半部分(公共)の話ですけれども、例えば私の所属する大学は社会福祉の大学ですから、公共性の問題にも福祉的な観点でかわらざるを得ないところがあります。私の専門は社会学なものですから、つまりそのような立場から見ると、公共的な記憶というのは政治性の問題とか、(その関わり方によって)他にもいろいろ問題があるわけですね。吉川さんが悩んだように、やはり政治が関与してくる。国際交流のように、必ず外交が入ってきますし、企業も入ってきますから、非常に複雑な問題になってきますね。それをどう処理するかということはアートだけの問題で収まらないので、学者とか、いろいろな人が入って討論しなければいけない問題だろうと思います。

社会学から言えることは、日本の場合でも沖縄戦とかで最終的に慰霊碑には戦士や住民を含めて被害者の名前を出しましたけれども、その前は各県人別の石碑だけです。グアムなんかに行ってもそうです。これに対し、特に戦勝国のアメリカの

場合は国家単位でかなりきれいな記念碑を立てた。記念碑研究ではこのような事例について記念碑がどういうものか、アートの価値はどうか、どのように政治性や社会構造が表象されているかといった解説が一般的です。この点からメディアエーターが今後担うべき課題とは、これまでの記念碑研究に近い役割や意味を持つているのか、それとも別の意味合いを持つているのかちょっとわかりにくかったものですから、そこら辺をもう少し説明していただければいいなとは思いました。

司会(石谷) ありがとうございます。記念碑の問題だけをとつても、神話のかたちで寓意的に表したり、市民像を立てたり、個人の名前を刻んだり、歴史的にも公共性の捉え方が異なってくる部分がありますので、それがどのように個人のトラウマという問題と関連するのか、あるいは、記憶が風化したときに、現代アーティストがさまざまなかたちで歴史や記憶を掘り下げたり、メディアエーションというかたちの取り組みによって記憶を再活性化するのか、それぞれ個別の場合に即して考える必要もあるでしょう。心理学、社会学、人類学、歴史学、平和学、芸術学などの専門家が意見を寄せ合う場もいっそう必要だと思います。

本日はこちら辺で閉めたいと思いますが、最後に森先生と吉川さんに一言ずついただいて終わりにしましょう。

森 こんな機会を持って、大変うれしく思いました。私は東日

本大震災はすぐ気になりながら、本務仕事が大変であり貢献できていません。常に罪悪感みたいなものがどこかにありましたが、これから何かの形でつながる時期が来るのではないかと感じています。長期的に関心を持っていきたいと改めて思った次第です。どうぞよろしくお願いいたします。

吉川 本当にセラピーとかPTSDとか専門的な知識がないままにいろいろなことをやってきて、これはすごい間違いだったらどうしようという危惧はいつも持ちながらやっていたので、今日は専門的なお立場からのお話をいろいろ伺って、非常に参考になりました。大阪とかからボランティアでカウンセラーの人たちが時々通ったりしてくれているので、何かワークシヨップをやるときにそういう人たちと一緒に協働できる機会もぜひ実験的に作ってみたいものだなとも思いました。今まで全然そんなことを考える余裕もなかったんですけれども、今日の皆さんのお話を聞いて思った次第です。

被災地は流されたまま何ら変わっていない、零細企業ながら立ち上がろうという人には全然援助がありません。南三陸町だと水産加工業のパートとかで暮らしてきた人たちなので、もとの給料は安いんですね。その安かったところに緊急雇用で今までの倍も三倍もの給料がおりてきていて、みんな一種のバブルになっている。だから、真面目に自分の企業を復興しようと思っても、従業員が集まらない。

それから、高台移転を決めたものの、自分の土地を持っている人はすぐ建てたいわけです。そうすると、今まで山だったところに家が建つと雑排水をそのまま山に直接捨てるようになる。そうすると、何億円もかけて塩害から救った田んぼに雑排水が流れ込む。海も今雑排水が全く入っていないので非常にきれいなんです。やがてそういう水が入っていく。それを規制する法律もないということがこの頃わかってきています。

マスコミで騒いでいるような「陸前高田の松がきました」とかいうのは、私たちにとっては何の復興でもない。陸前高田の人にとっては復興かもしれないけれども、皆さんのこれからの不安というのはそういう問題ではないと思うんですね。例えば、高速道路はすぐできるのに、高台に逃げるための道路は全く拡幅されないために、二〇一二年一二月の頭に津波警報が出たとき、やはり渋滞して登れない車がいっぱいあったんですね。なぜ、莫大な予算で高速道路の橋脚は建つのに、大した予算もかからないような高台への道の拡幅ができないのかなと私は素人ながらに思うわけです。

だから、政治家なんて誰も本当に被災者の立場になって考えてくれないと断言できますし、マスコミも悲劇の美談みたくのを探しに来る。それで生半可の報道をして、その後いろいろなクレームがついて商品が販売できなくなったりとか、そういうことがいっぱいあるんですよ。仙台までおいでになった

ら、私のほうでご案内できませんので、一度南三陸町にもお出かけいただけたらなと思います。関心を持っていただくことですね。何かするということではなくて全然構わないので、今日縁がありましたので、南三陸町がニュースに出たら、ぜひご注目いただければと思います。

司会（石谷） ありがとうございます。私自身も実際に援助活動をしているわけではありませんので、関わるときの距離感も難しいところがあります。甲南大学では二年前にカウンセリングセンターで避難者や援助者でPTSDがしんどいという方の無料カウンセリングを呼びかけたり、対応のガイドラインを策定したりというかわり方を模索したという経緯があります。そうした中で、先ほどカウンセラーはいすに座っているだけというお話があったように、向こうから来ないところらもどこまで関わるができるのか、関わるべきなのかということの判断が難しいことがあるかもしれません。職業的な範囲をわきまえるということだったり、別の事柄に取り組んでいたりと直接的な行動としてはなかなか動けないということも良く理解できます。そうした場合に、助けを必要としているということをそれぞれが素直に人に伝えていくということも支援者との連携をよくしていく方法なのではないかと思います。援助者のPTSDの心配もありますので、吉川さんもしんどいときは助けをすぐにも言えるような気持ちでいただければと思っています。

今日は長い時間になりましたけれども、どうもありがとうございます。また何か似たような企画がありましたらお知らせします。ぜひとも議論の続きに加わっていただければと思います。「拍手」

〈終了〉